
恋する少年と2人の居候。

柴わんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する少年と2人の居候。

【Zコード】

Z0549L

【作者名】

柴わんこ

【あらすじ】

ここにとある恋する少年がいた。
そして少年の下には2人の居候がいる。

1人はその恋を応援するのだがもう一人はそれを好ましく思っていない。

そんな少年と居候の応援したりアピールしたりするのラブコメの始まりです！

ようやく20000PVです。応援よろしくお願ひします。

1話（前書き）

なんかすいません…」の口の廻、コロを間違えて短編と投稿していました

とあるマンションの一室にて作戦会議が行われていた

「上手くいくかな~」

と少々不安気味の彼が神谷健一こと彼女を作ろうと頑張る男子。
「大丈夫だつて、だつてあたしの作戦なんだよ?」

自信満々にそういう彼女は天原香織こと応援する居候。

そしてその後ろで、うーーとうなだれているのが天原希。

彼女は作戦会議には参加しない、健一の事が好きだからだ

じゃあ邪魔しに入るのか?と言つとそうではない。むしろ邪魔すれば
彼に嫌われてしまうからだ。なので彼女は何もしない事にしている

神谷健一、彼はお金持ちの家に生まれた少年である。
しかし、いまとなつては父の仕送りだけで生活する。
そして彼の元には2人の居候がいる

2人は双子の姉妹であり、香織が姉で希が妹だ。
3人とも高校生活を送っている。

そして健一は恋の真っ最中にあった。

昼休み、それは健一にとつてチャンスの時間であった。

彼が狙つているのは小川香苗おがわかなえと言つ少し小柄な女の子だった
そして今彼女が教室を出た

「いけー健ちゃん」

そう香織が言つと健一は教室を飛び出した。

そして希は上手くこもれせんよつこと手を合わせた

健一はすぐに声をかけた。

「かつ香苗さん」

緊張のせいか声が裏返っていた。

「声が裏返ってるよ～？」

香苗はそんな健一にくすっと笑った。

「どうしてだろ裏返っちゃった、はは」

互いにあははと笑う、ほほえましい光景なのだが…その2人の後ろから嫉妬のオーラが

見えているのが絵として惜しい所だつたりする。

「おい希?何してるの～？」

そのオーラを察知した香織は妹のところへ笑いをこらえつつ近寄る。

「監視ー」

そう言つと香織はますます笑いをこらえよつとがんばつた。

「監視つてちよつと健ちゃんにまづくな〜」?

「ばれなきや大丈夫」

「つたく、そんな事しなくてもお家に帰ればあーんな事やこーんな事まで希のやりたい放題なのに〜」

「やりたい放題?…例えば?」

そう言つと香織が耳元でひそひそと何かを伝える

「がんばってみる」

希は家に帰れば作戦を実行する事にした。

「ねえ香苗さん、もし日曜日暇だつたらお俺と一緒にライブ行かない？」

「これこそが香織が健一に伝えた作戦だった
「うーん… 日曜なのが惜しいかも、土曜だつたら空いてるんだけどね」

「そりなんだ…ちょっと残念かも」

チケットが余つてしまつた…そして何より一緒にライブへ行けなくなつたからだ。

「え？ どうして？」

もちろん一緒に行きたかったからだ、でもそんなこと恥ずかしくて言えなかつた。

「あついやほら一日だけそれで惜しいなーって」

「へへっそうだね」

本当はそりぢやない、別にライブなんかどうでも良いんだ何より…あの2人のどっちかと行かなくちゃ行けなくなつたのが問題に浮上したんだ…！

どうする…？ 希と行くか？ それともいつもお世話になつている香織と行くのか？

香織と一緒にけば希が暇になる、逆も同じ…いや香織なら一日くらい何とかなるんじや

学校が終わり、部活に所属していない3人はさつと家へと帰る
玄関の前に立ち健一が鍵を開ける

「早く早くー」

「急かすなこいら」

「健一早くして」

「希も乗つかるな」

2人に急かされながら鍵を開け中へと入る健一

3人はとりあえずソファーへと腰を掛けた。

「疲れたねー、健ちゃんが早く空けないからいけないんだよ」

「なんでおれのせいなんだ」

「じゃ夕食作つてくる」

「希ー失敗しないようになー」

「大丈夫」

希は失敗しなかった、無事夕食をとり終えた3人は雑談モードに入つた。

「はあー疲れたねーそれより健ちゃん上手く行つたの?」

希の体がぴくつと反応する

「いやダメだつた」

希がにやける、嬉しくてたまらないのだ

「じゃあさ健ちゃん、余つたチケットで希とライブへ行きなよ」

「希ど?」

そう言いながら希のほうへ目を向ける、するとこいつの間にか健一のすぐ隣に移動していた

希はうんうんと首を縦に振つていた

「香織はどうするんだよ」

「あたしはいよいよそれよりいつも暇してる希と行きなつて

「行こうよー」

希が甘え始めた。

「おつけ一分かつた、じゃ希と行つて来るわ」

「やつたー香織ありがと」

「ん? 何のことかな?」

本当だつたら希が自分で健一作戦上手く行つた? や、じゃあ一緒に行こ?

と言わないといけなかつたのだが香織が代わりに言つてくれたのだ。

それに対するあいがとうごう駄だ。

「じゃあ今日は健一と寝る~」

「え、何で?」

「えへダメ?」

「いつも通り自分の部屋で寝ろって」

そうは言つうが健一も健全な男の子、頭の中では『バツチコーアイ!』と思つてゐる

「いいじゃん健ちゃん希と一緒に寝てあげなよ」

これは単なる希のアピールである、それに気づいた香織がすかさずフォローする

「まあ俺は別に良いんだけど?」

「実は希が一緒に寝てくれる」と対してドキドキしてゐるじゅないの~?」

「ホント!? 健一!」

「バツ、バーク! 香織! そんなことないぜ? 僕はな女の子の一人や二人隣で寝てたって

別にそんなドキドキなんてしねえよ!..」

「じゃああたしもそつちで寝ようかな~?」

「いいいぜー? 別に俺は平気なんだから

なんかドキドキしてきた

「でもあたしは遠慮するわーじゃそういう駄だういちの妹に向かした

ら容赦しないからね

「なつ何もしねえって!」

つたく何言つてんだよ香織の奴

「健一なら希は何をされたつて良い」

「何本気になつてんだ? 希、そしてその『おいで』と言わんばかりの両手は何だ?」

「おいでー」

「ああ もう一香織ーお前のせいでつてもうこねえー。」

「ひってー一日が終わった

1話（後書き）

応援よろしくお願ひします
もう一つの『俺と彼女と妹と。』 もよろしくおねがいします
感想気軽に書いてください、お気に入りに入れてくれると嬉しい
です
ではこの辺で

「あ、今日は希とライブへ行く日だ、希はすく機嫌が良い
もつむつきから俺の部屋で何を着ようかーこれじゃないこれじゃな
いと
着たり脱いだりしてこる、いつちの身にもなりやがれーってんだ
でもまあ女子だから仕方ねえのかな？」

それでもなんで俺の部屋で着替えてるんだか

そしてここ一週間でなーんで俺の部屋が俺と希の部屋になつたんだか
香織の奴、『健一と希の部屋』なんてプレート作りやがつて
ああーもうビビりじてこいつなつたんだか

それはもうと今日ま希とライブへ行くことになつている

「希　？準備おつけー？？」
着替えが終わつたか確認してみる
「急かさないでよ健一」
「まだなのか？」
「つうん、もう大丈夫」

どうやら終わつたらしく、じゃ行くとするか

「じゃ希 行こーぜー」「行こーぜー」

部屋を出ると香織がテレビを見ていた

こいつを見るや否や何か言いたげな表情を浮かべた

「な、なんだよ」
「いやー、お一人さんがお似合こに見えてねー」
「やだあ照れちゅうよお姉ちゅん」
「」

香織は一体何がしたいんだ？

「じゃお姉ちゃん健一と一緒に『デート』に行つて来ますー。」

「なんか強調した？ デートのところ

「おう行つて来いでー『デートー』。」

やつぱりだ、しかも香織も…この2人、デートといつ言葉がそんなに好きなのか？ああん？

「じゃ香織、行つてくるわ」

「行つてくるわ～」

「お留守番なら任せとおけ！ 誰が来てもお前らの聖域へやには入れさせん！」

せ、聖域？…な、なんかの間違いじゃ…

「お…おう、とつあえず任せた」

「早く行こ～旦那さん」

「はいはい、さつさと行こ～うねー奥さんつておー」

俺と希が組むと大体そこで夫婦ネタが入つてくる、もちろん俺達はそんな仲ではない。

香織のせいで少し足止めされたけどライブの時間には余裕で間に合ふからいいや

なーんてことを思いつつ俺は家を出た。

やつぱり日曜という休日のせいか人が多かった。

信号に差し掛かると決まって軽く20人は集まつた。

「普段外出ないから分からなかつたけど…こんなに人が多いとは」
気のせいか男たちの視線が希に集中している気がする…気のせいか

「そうだね一人が多いねーはぐれたら大変だねー」

「うーん、大丈夫でしょ？」

「なんで？」

「だつて希、俺の腕をしつかりと掴んでるし…離す氣ないでしょ？」

「もちろん…」

笑顔で言つた笑顔で…あーもつ、ほらあいつから『何見せ付けてくれてんだよ…』

とでも言ひたげなオーラが……つて氣のせいが

そつこねばさつと掴むと言つたけどこれは掴む、とこうより両腕を交差させていく時点でしがみ付いていふと言つのが正解かも…そのせいで俺は少し歩きづらい…あーなんか疲れてきたあートイレ行きでー

「希 ちゅつとトイレ行つてきて良いか？」

「え？トイレ…ダメー」

ダメつて…おいおい

「希にそういう事を言つ權利はないぞー、とこうわけでトイレへ行つてくるちょっとそこで待つてて」

そつ言つと希は腕のロックを解除してくれた。

「こんな可愛い子あんまり待たせちゃダメだよ～？」

「分かつて分かつて、早く戻つてくるよ

そつ言つて俺はトイレへ行つた。

トイレにはタバコの匂いが充満していた。

「わータバコくそー…」

中には3人の中年男性がいた…ん?こいつらもしかして…

「いやあ佐藤氏、今日はとても良じ田でござれぬ

「『』である？ 忍者？ ジャパーズ忍者？

「ああ確かに！ まさか拙者1／8スケールフィギュアが買えるとは思わなかつたで『』である」

「拙者？ …俺の記憶が正しければコイツら…

「2人は良いよ…俺なんて…今日女の子に声かけただけで『うわあオタクだキモー』とか言われたんだぜ？」

「…オタク… そう… オタク… 関わりたくないわー

「藤原殿、ドンマイで『』であるよ、あと話がずれてこる『』である

「え？ ああ、ごめん」

「それよりも次は何処を回るのだ？」

「ああー そつだなー… とりあえずメイド喫茶にでもよひつと思つて いるんだけど」

「おつけで『』… 拙者いつ覗えてもジャンケンとか強いで『』であるよ？！」

「ああそつなんだ…」

ふーんジャンケンねえ… つてかメイド喫茶つてジャンケンするところなの？？

「試しにやつてみる『』であるか？」

「え？ まあいいけど」

『最初はグー… ジャンケンポンッ…』

ブツ！ …あいつ強いとか良いながら負けてるし… やばい笑いこらえるのが精一杯なんですけど… つて何処の女子高校生だよ（笑）

「拙者が負けるなんて…」

そう男が言つと氣まずい空気が流れ始めた… それに気づいたリーダー格の若い男は氣を利かせ

『たつたまだよ、もつ一回やるつぜ？』 ともう一度勝負に出た。結果を言つと何度もアイコになり結局また勝つてしまい、もうびつ

する」とも出来ない空氣を発生させてしまった。ぐだらねえ、ただのジャンケンに過ぎねえじやんか、どうしてこんな空氣になるんだか…俺には分からなー…………とりあえずどうしてくれない?

不意に思ついた【殺氣のオーラ】を出してみる。もちろん効き田は無い

「む?」この殺氣…まさか…!」

「拙者も感じるで」やれるよ…!」

…効き田あつたみたい

「やばいぞ」明らかに拙者達より戦闘力は上…!」

「かつかくなる上は…!」

ちょっと面白いので今度は意識してオーラを出してみる…

「ふー2人は終わつたで」やれるか?…!」

「せつ拙者は佐藤氏と藤原氏のタイミングを見計らつていたで」やれるよ?!

「ああ俺も2人が離れたら離れよつと思つていたんだけど…長くなつたな」

二人がオーラ(?)に刺激され、帰ろうよと言わんばかりにセリフを吐いた。

そして3人が退きようやく空きが出来た…

便器は3つしかないわけじやなかつた。

そのトイレには便器が6つ用意されていた。

女子から言わせて見れば3つしか使っていなかつたから残りの3つを使えば良いじやんと

意見が出そなとこりだが男子のエチケット的な何かに引っかかる

から俺は使わなかつた。

「つたく何でさつさとどいてくれなかつたんだ、しかも2回も便器の水洗が起動してたし」

愚痴りながら小便を終え、手を洗い、髪形をチェックした。ふいに事件が起きた、それは突然の事だつた

「嫌です！離してください希には待つている人が居るんです！」

2話（後書き）

応援みたいな感想待つてます
お気に入りに登録してくださるとやる返事が出来ます
ではこのへんで

3 謝（前書き）

暇つぶしでもなれば幸いです。

「嫌です！離してください希には待っている人が居るんです！」

希の悲鳴にも近い声が外から聞こえた…！

「希…」

俺は急いで外へと飛び出した

そこで俺が見たのは

「君、今から俺らと一緒にお茶しない？」

「藤原氏がナンパに出たでござる！」

「頑張れ藤原氏！」

あいつら…何度も俺を困らせるんじゃねえよ…！

「だから希には待っている人が…！」

必死に希は誘いを断つていた。

「えー？その割には誰も来ないじゃん」

「だからいるんですってば！待ってる人が！」

見てられなくなってきた。そつそと助けてやるつ

一つため息をつき、希の下へ走る

「希…」

希は俺の声にすぐ反応した

「健一！遅いよ～

いつものちょっとぴりほんわかした雰囲気の希に戻っていた。

そして俺はすぐに希の手を取った。

「じゃ行くぞ」

そう言うと希はうん！と頷いた。

そしてそのまま走り出せうとしたのだが

「 ちょっと待てよ、誰だよお前？」

俺はその藤原とか言う奴に腕を掴まれてしまった

「ああ！？お前こそ誰だよ！」

「お前なあ、人の恋路を邪魔して良いと思

藤原とか言う奴が何かを言いかけたときだつた、次の瞬間

「 どっちが邪魔しとんじゃゴルアアアアア！！！」

その藤原が吹っ飛んで行つた

ふつ飛ばした犯人は… 希だ。

希はキレた、ああ～あ～【助けてやるつと思ったのに】

そして希は藤原とか言う奴の前に立つた

「人の恋路邪魔してんのにそんなこと言えるのかよ？」

「え？あ、あの、えつと…」

「あと、あたしの健一に触らないでくれる？」

藤原を含めた3人の男達はじりじりと後ずさりをし始めた。

希は俺にアイマスクを渡した

『健一それつけて～』瞬間に希がいつも通りに戻る。

『はいはい』と、俺はアイマスクを受け取りそれを装着する。

何も見えないが音だけは聞こえた。

「あたしの恋路を邪魔するなあ あああ……！」

「うううわああああ……！」

「あおおりやああああ……！」

「痛てえええ……！」

「そんな声が俺の耳に届いた。

ドガツ！バコツ！バキン……

頼むから店のものとか壊さないでくれよ希？

事態は収束した。

「次、こんなことしたら……ビリなるか分かるよね？」

やつぱ女って怖ええ……

「すっスマセンでした！」

「健一、取つてもいいよーでも後ろは見ないでね？」

「あ、ああ……」

俺はアイマスクを外し、前へ歩き出した…

後ろから男のうめき声がした、気にしないことにした。

ちなみに『救急車…』と言った次に

『うわあキモー！閑わらない方が良いよー』と聞こえたような気がした。

もちろん気にしないことにした。

それから希はえへへーとか言いながらまた俺の腕にしがみ付いてきた。
「気にしない」とこした。

2人で数分歩いた所でようやく会場に着いた。

『お一人様ですか?』

「はい、そうです」

俺と希（香苗さん用）のチケットを渡し、中へ入った。

3話（後書き）

感想待つてます！ホントに感想待つてます！
コメントみたいな感じで結構なんで書いてくださると大変ありがとうございました。
いです。

それでは失礼します。

4話（前書き）

感想など送つてもうれると助かります。お願いします。

うわあーライブってすごいな、俺は第一にそう思つた。

次に警備員の人メガホンを取り出した。

『皆さん！他の人を押したり殴ったりしないでくださいね！ケガ人が出ると私達の仕事が増えますから…』

次の瞬間そこにいたお客たちは大笑いした。

「ただ単にサボりたいだけじゃあははっ面白いな！」

「健一、楽しいのはこれからだよ？」

身長差や段差の関係もあり、希は上田遣いになつてそう言った。

「そつか、ははっ楽しいのはこれからか、あははっ」

やべえこの雰囲気すごく心地が良い、常に笑つて居たくなるくらいいだ。

それから何分か待つた頃、マイクのキーンという音が会場全体に響き渡つた

その場に居た全員が『来た！』と感じた

その予感は的中した

「みんなー！おまたせつ！それじゃ早速始めんぞー！！」

舞台の横から1人の女性が現れその後ろから3人の女性がそれぞれの位置に駆け寄つていった。

「まずは…これだつ！！」

皆はその曲が分かるんだろうな、周りから『おおー』という声が聞こえてきた。

俺は何にも分かんねえからただ単にそのライブを楽しむことにした。

ふと隣を見ると希が「ひかりをずっと見てる」とこぼづいた

「健一、楽しい？」

「ああ楽しいよ、あははっやばこ帰りたくないなるかも」

「それじゃあたしとこのままどっか行つやつへ？」

「それは…バスだなーははっ

「

「その時確かに希が何かを言つてこた…でもその声は周りの声援に搔き消された。

もちろん俺はその時何を言つたのかは知らない。

」

それからうといもの、俺と希は始めてライブといつのを楽しんだ。

「へえあのアーティストって結構有名なアーティストだつたんだ

「うん、あたしも始めて聴いたんだけど、結構良かつたね」

「おう、確かに良かつた、やつぱ最後の曲が一番良かつた

「あたしも！旦那さん気が合つね～！」

「やうだなー気が合つくな奥さん～～～ひら

玄関に立ち希に急かされつつ俺は鍵を開けた。

「ただこ

「　健ちゃんおつかえりー」

香織が出迎えてくれた。

「お出迎えは良いけど…その、何と言つか

「なあに？」

「分かつててやつてるんだう？」

「普通、抱きついてくる奴がいるか？…でも男としてこれは嬉しい…

「まあねーいうしたら顔が赤くなるんじゃないかと思つてねー」

「ば、ばーか、俺がこんなことで赤くなるわけないだろ？」

「どうかなー？」

「ちゅうとお姉ちゃん、健一はあたしのだよ? あんまりこじつけダメ」

「俺は誰の物でもねえ、それにいつ希の物になつたんだ?」

毎日この感じの会話が繰り返されている。

俺は最近うらやましい位置にいることが分かつてきたり。

「さあさあ今日はあたしが作ったよー」

一体香織は何を作つたんだろうねー

「ん? 何作つた?」

手間の掛かるものは作らないはず…

…まあとりあえずテーブルに着いた。

「お姉ちゃん料理のレパートリーが狭いからね~」

「まあそつ言わずに、元はと言えば俺が料理できないからなんだし?」

「健一が料理できないのは問題ない、だつて奥さんであるあたしの仕事なんだから」

「はいはいそうですか奥さんよ」

とか何とか話してると香織がお盆を両手に持つてきた

「はいお鍋作つたよ!」

「「わーすごいよく頑張つたねー」」（棒読み）

俺と希は声を揃え、棒読みなところまで揃えてそう言つてやつた。

「…なこそこその『ああやつぱり簡単な物しか出ないよね』って田

は

「ピンポンピンポン…正解で~す」

「正解です」

「やつた正解だーーー！なんか悔しいぞ？！」

「じゃあ…今回の【料理】の手順を言つてもらおうか？」
「言つてもらおうかー」

「え、えつと…まず材料を全て揃えて」
はいはい

「それから鍋に水と醤油と後いろんな物を注ぎます」

「んで？」

「それから材料を全て鍋に放り込みます」

「それで？」

「え？」

「俺がバカだからその先を聞いたんじゃないぞ？あえてその先を聞いてみたんだ

「だから、放り込んだ後は？」

「い、いや…終わり…」

「へえー簡単だ」

「簡単だー」

「わつ悪かつたな…簡単でよ」

「少し香織が拗ねた、でもこれが普通なんだなー

「でもさ、そんなに簡単なら俺にも作り方教えろよ

「…いついいけど…？」

「つてかさー顔赤くない？暑いからか？」

「まつーまあな！そつそんな事より早く食べよつー。」

妹は見逃さなかつた

姉の赤くなつた顔を

4話（後書き）

お気に入りに入れてくださいね。

『俺と彼女と妹と。』こちらの感想も待っています。

PS・評価をつけてくださった方へ感謝をここへ記します。

5話（前書き）

感想待つてます

「起きて健……」「ん……？」
もう朝か…学校だるいなー…って起こしてもうのが口課になり始めてる……

「…………夜だけど」「え…?」

突然俺は希に起こされた。

用件はこうだ『そこに何か黒いものがいる』
俺はそれを調べるために起こされた。

「無視すればいいんじゃない?」
「ダメ、この神聖なる部屋をあたしたち以外のものが汚してはいけない」

「…そうですか」

俺は腕に希を装備（？）し、その黒き物体に近づいた。

「ちよん」

「…………」

「何だ、何にもおきない…って事はこれは生き物じゃなくて俺たち

のどっちかの服が何かだな

「安心したあー」

「…………んつ」

「「「…え?」」

声がした。俺と希は顔を合わせ驚いた

「…希…」

「何? 惣れぢやつた?」

「冗談を言つ場面じやないつてー」

明らかに声がした。

誰だ……こいつはこいつたい誰なんだ

「健一、電氣^{つけ}点けるね」

「お、おつ…おつ…ちよつと離れよつ

俺はそれから距離を置き、希は明かりを点けよつと移動した。

「ほー点けたー」

「おつ点いたー」

俺と希はまた驚いた。

「 健一、この女誰?」

「 の? 希? —おいつ! 俺も誰だか知らなこつて… —」

「 ホント?」

「 ああホントや… ってかマジでこの人ビリあるよ

すると希が近寄り、おーいと一聲掛けた

「…健一、ここの子…女の子
「ええー?」

俺からは希が邪魔でよく見えない。
女の子?どうして女の子が?…

「……健一ー!」
「なつなんだ希ツーー?」
「ここの子…あたしより胸が大きい…!…」
「それよりもっと大きな問題があるだろ田の前に…ーー!」
「健ーー!」
「今度は何だ?ー!」
「ここの子封筒持つてる」

本当に封筒を持っていた。

希はそれを開封し、読み上げた

『よお健一、俺だ父さんだ』
「えー!親父?ー!」
『実はな、父さん、お前が産まれる前に一人子供が居たんだ
「隠し子ー?』

『でな、今父さん倒産しそうなんだ(笑)』
「寒ツーーついでに懐も寒かつたりして…ー!』

俺上手ことと言つた……ってそんな場合、いつや

『だからもう一つの面倒見てやつてくれ』

「……ちよ……こきなりゅあれるわ……」

この家にまた女子が増えるのかよ……しかもなんだ?」この子は俺ことつて腹違ひの姉つてことか?…

そんな頭を抱える俺にとどめのメッセージが

『P.S.・仕送り止つたひめんぢやこへへー。』

「ふやけんなんあ!…!…!」

思いつきり叫んでしまつた。恥ずかしいくらいに叫んでしまつた。

手紙を読み終えた希は時刻を忘れ香織を呼び起しここに行つた。

「お姉ちゃん!大変!ライバルが…!…!」

それから何があつたかはあまり覚えていない。
いきなりすぎて俺の頭がパンクしたんだ多分。

それでも一つだけ分かつたことがある、それは

「健一さん、起きてください」

俺はそり起しきされた…一応言つて置く、田原ましませやんとセシートしてある。

それより早く起しきれるんだ。起きれないのではない!

「え?…あつ!え!…あつ…あさよひ!じやこます!…」

わけが分からなくなり挨拶をしてしまつた。

「ええおはよひじわいます健一さん」

昨日は足を曲げて丸くなつていたから分からなかつたけど、この人

俺より背が高い

：あ胸大きい、希はこのことを言つてたのか…って俺は何を考えてるんだ

「あのつ…勝手に手紙を読んだんですけど」

「ああ、そうだつたんですかそれで無かつたんですね」

「ああすいません」

「申し遅れました私、真奈と申します」
まな

ひとつだけ分かつたこと…この子は居候ではない。家族だといつことだ。

よつて嬉しいことに家族が増えた事になる。

ちなみに…もし真奈さんがブスだつた場合…悲しい出来事となつていただろつ

5話（後書き）

短くてすいません……テスト期間中だったもので……
【俺と彼女と妹と。】 いろいろよければ読んでやつてください
ではこの辺で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0549/>

恋する少年と2人の居候。

2010年10月11日14時50分発行